

令和 3 年 6 月 11 日現在

機関番号：13201

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K12318

研究課題名(和文) 文芸復興運動とジェイムズ・ジョイスの連動 女性表象の脱神話化を中心に

研究課題名(英文) The Links between the Irish Literary Revival and James Joyce: Demythologization of National Female Iconography

研究代表者

結城 史郎 (Yuki, Shiro)

富山大学・学術研究部人文科学系・准教授

研究者番号：00757346

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：1890年代から1920年代にかけてのアイランドでは、「文芸復興」と呼ばれる豊穡な文学運動が開花した。本研究の目的は、この運動がジェイムズ・ジョイスに与えた影響を明らかにするものであった。ジョイスは自国の狭隘な自民族中心主義の文学に反発し、大陸のモダニズムの運動に共鳴したとされるが、その文学観の基礎は同時代のアイランドで培われたはずである。国家をめぐる女性表象の脱神話化を中心に、文芸復興運動とジョイスの具体的な関りを論じた。そのためW. B. イェイツ、J. M. シング、レイディ・グレゴリーを中心に、ジェイムズ・ジョイスの連動を探り、対立というこれまでの通説を覆すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は国家をめぐる女性表象の脱神話化をめぐる、文芸復興家とジョイスの連動を明らかにした。学術的意義や社会的意義として、以下の3点を挙げたい。まず、国家としての女性表象の脱神話化という観点に即し、文芸復興家とジョイスの連動を論じることができた。次に、ジョイスの作品におけるモダニズムという大陸の文学からの影響と思えるかなりの部分も、文芸復興家の文学と軌を一にしていることを明らかにした。さらに、文芸復興家とジョイスの連動という観点により、狭隘な国民文学として定立されてきた文芸復興家たちの作品も、むしろ大陸的な視座を取り込んでいたことを析出した。

研究成果の概要(英文)：From 1890s to 1920s in Ireland what is called the Literary Revival flourished. My search project aimed at elucidating the influence of this movement on James Joyce. Joyce is said that he resisted to the narrow and ethnocentric literature of his country and that he sympathized with the modernist movement in the continent, but his literature was based on the contemporary Irish literature. In focusing on the demythologization of female iconography of Ireland, I analyzed mainly the works of W. B. Yeats, J. M. Synge, and Lady Gregory, to whom Joyce is opposed in that they seemingly endeavored to create nationalistic literature. However, I argued that they were not different from Joyce in broadening the perspectives of literature.

研究分野：アイランド文学

キーワード：女性表象の脱神話化 文芸復興 ジェイムズ・ジョイス

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

ジェームズ・ジョイスの文学は、W. B. イェイツ、J. M. シング、レイディ・グレゴリーといった文芸復興家への対立から開始された、と論じる向きが多い。事実、ジョイスの作品にはこれら先輩作家への風刺が読み取れる。そのため、アイルランドにおける文学研究においても、Thomas Kinsella の *The Dual Tradition: An Essay on Poetry and Politics in Ireland* (1995) や Neil Corcoran の *After Yeats and Joyce: Reading Modern Irish Literature* (1997) など、文芸復興の中心人物のイェイツと比べ、ジョイスをその対立者と位置づけている。またこの対立図式は、最近のジョイス研究においても、Len Platt の *Joyce and the Anglo-Irish* (1998) や Willard Potts の *Joyce and the Two Irelands* (2000) などにおいても、さらに具体的に論じられている。こうした研究の背景にあるのは、イェイツたちとジョイスの出自の相違である。イェイツたちがイギリス系のプロテスタントであったのに対し、ジョイスはケルト系のカトリックであった。両者の間には歪んだ対立が胚胎していたとされる。

その一方、ジョイスの文学は大陸との関係で論じられることも多い。ジョイスは若くしてアイルランドを離脱し、その後はトリエステ、チューリヒ、パリと大陸の都市を移り住んだ。いずれの作品も都市ダブリンを舞台にしながら、手法やテーマなど、大陸の文学の影響が色濃い。文学の地平を徹底的に開拓した、国際的な作家として賞賛されている。1905年から1915年に至る10年を過ごしたトリエステは、オーストリア＝ハンガリー帝国支配下の他民族・多言語の都市であった。また、第一次大戦のために1915年から1919年まで疎開していたチューリヒでは、世界各地から集まった戦争忌避者の新しい考えに関心を示した。さらに、1920年から1940年まで留まったパリでは、様々な領域でモダニズムの運動が展開していた。Joseph Kelly が *Our Joyce: From Cast to Canon* (1998) で指摘しているように、ジョイスは、アイルランド人作家として出発しながらも、いつしか世界的な作家へと変貌していったのだ。 *Dubliners* (1914) から、 *A Portrait of the Artist as a Young Man* (1916)、 *Ulysses* (1922)、そして *Finnegans Wake* (1939) に至る一連の作品は、そのことを示している。

いずれのジョイスも今日のアイルランド文学の研究対象である。1993年に発行されたジョイスの顔が描かれた10ポンド紙幣には、表がゲール語とダブリンの地誌、裏が多言語で書かれた *Finnegans Wake* の冒頭部からの引用と世界へ連結するリフィ川の女性像が描かれている。独自の文化を有すると同時に、世界に開かれた国家であることを示唆している。そのような国家を巧みに具現しているのがジョイスである。性という暗部をも含む都市ダブリンの微細な描写のために同胞から忌避されてきたが、今や文芸復興家と対比され、その作品が評価されている。ジョイスは植民地支配という記憶に固執する民族主義者のみならず、多文化の包摂を説く修正主義者にとっても都合のいい作家である。

にもかかわらず、ジョイスの文学を理解し、その作風に共鳴したのは、少数のカトリックの作家を除くと、イェイツ、シング、グレゴリーら文芸復興家たちであった。彼らはジョイスの大陸への離脱を羨望し、ジョイスの側も文芸復興を見守っていた。すでに文芸復興家の一人としてジョイスを論じた著作も多い。Seamus Deane の *Celtic Revivals: Essays in Modern Irish Literature, 1880-1980* (1985)、あるいは C. L. Innes の *Woman and Nation in Irish Literature and Society, 1880-1935* (1993) などもあり、文芸復興家とジョイスの対立というのは、疑念のある評価である。ジョイスの10ポンド紙幣のスカシには、アイルランドの女性表象であるキャスリーン・ニ・フーリハンの像がある。これはジョイスと文芸復興家が崩すべき民族主義の亡霊であった。本研究では、この女性表象の脱神話化を中心に、文芸復興家とジョイスの連動を探ることとした。

ジョイスも文芸復興家も脱植民地化を唱えながら、武装蜂起を説く民族主義を奉ずることはなかった。それでもこれまでの研究では、「復興」というレトロな枠組に縛られ、両者を結ぶモダンな視点が欠落していた。Richard Ellmann の著名な *James Joyce* (1956/1982) でも、交友関係を綴っているにすぎない。ジョイス研究においても文芸復興家との対立面が前景化されている。文芸復興家が民族の良心の「創造」を念頭に入れた、モダンな作家であることを論じる研究者が少ないのは、そうした背景による。文芸復興家とジョイスの国家観への関心から、本研究に達した次第である。

### 2. 研究の目的

本研究はイェイツ、シング、グレゴリーら文芸復興家とジョイスとの関りをめぐり、対立というこれまでの評価に対し、連動という観点で見直すことにあった。国家についての女性表象をめぐりそれぞれの脱神話化を検証し、むしろジョイスとの連動を探ることを主な目的とした。女性表象の脱神話化という本研究の着想は、これまでの研究から得た、文芸復興家とジョイスの大きな交点でもあるとの洞察による。イギリスの植民地支配下のアイルランドでは、国家としての女性表象は民族主義の要であったが、文芸復興家もジョイスもその脱神話化を試み、「復興」よりも、モダンな民族の良心の「創造」を目指していたことを析出した。

当時のアイルランドでは、植民地支配への対立として、黒髪のロザリーやキャスリーン・ニ・フーリハンといった女性表象が流布していた。しかしながら、文芸復興家はその抽象的な女性表象の脱神話化を図り、具体的な女性像の構築を試みた。ジョイスの創作もそうした影響下にあっ

たはずである。かくして本研究では、*Ulysses* の Molly Bloom や *Finnegans Wake* の ALP の赤裸々な告白も、文芸復興の作家とのインターテクスチュアルな成果であるとの結論へ向け、考察を加えることにした。

### 3. 研究の方法

本研究は、文芸復興家とジョイスの関り、とりわけ国家をめぐる女性表象の脱神話化というこれまでの研究の空白部を詳細に検証し、両者の連動を明らかにするものである。以下の3点を挙げたい。

(1)まず、国家としての女性表象の脱神話化という観点に即して、文芸復興家とジョイスの関りを検証した。そして文芸復興家たちがその総称にも違わず、インターテクスチュアルな女性像を構想したように、ジョイスもその流れに連動した女性像の創作を試みていたことを析出した。こうして Len Platt の *Joyce and the Anglo-Irish* (1998) など、文芸復興家たちへの対立者という一枚岩的なジョイス論を修正し、文芸復興とジョイスの接点を具体化した。

(2)次に、ジョイスの作品におけるモダニズムという大陸の文学からの影響と思えるかなりの部分も、文芸復興家とのインターテクスチュアルという観点から、両者の連動が判明した。アイルランド側からのジョイス評価については、Emer Nolan の *James Joyce and Nationalism* (1995) のように、モダニズムの基礎がアイルランドにあったとする論考もあるが、文芸復興家も大陸の動向に敏感に反応し、「復興」と同時に「創造」をこととしていた。本研究は Nolan の修正の修正となる。ジョイスのモダニズムは、文芸復興家との連動によるところが大である。

(3)さらに、文芸復興家とジョイスの連動という観点から、アイルランドの文学研究における南北の対立図式、とりわけ民族主義と修正主義の間の対立に、対案を提起した。アイルランドの文学研究はジョイスの文学評価を基準に、予定調和的な国民文学史を構想する傾向にあるが、ジョイスとの連動という観点から、文芸復興家についての再評価が可能となった。

### 4. 研究成果

(1)2018年度においては、W. B. イェイツとジェームズ・ジョイスの女性像という観点から、両者の連動を考察した。イェイツとジョイスの間には大きな相違があったとの指摘もある。その範例がイェイツとグレゴリーの共作の劇、*Cathleen ni Houlihan* (1902) をめぐるジョイスの対立である。イェイツが晩年の詩“Man and the Echo”で述べているように、その劇が民族主義を煽り、1916年の復活祭蜂起を始動したと受け止められていたのだ。そのためジョイスは非暴力によって立ち、殉教を強いる民族主義に、そしてイェイツの劇に敵対していた。こうしたジョイスの姿勢は Edona Longley や Patrick Keane といった修正主義者と変わらない。

にもかかわらず、イェイツが武装蜂起を説いたわけではない。怪物を統御できなかったフランケンシュタイン博士と同じく、自らの劇が一人歩きしたにすぎない。イェイツは国民に自己犠牲を強いたのではなく、脱植民地化の必要性を語りたかっただけであった。事実、イェイツは *The Tower* (1928) や *The Winding Stair and Other Poems* (1933) など、その後の詩集では国家をめぐる女性表象の脱神話化を試みている。E. B. Cullingford の *Gender and History in Yeats's Love Poetry* (1984) など、フェミニズムの視点によるイェイツの女性像についての研究書も精査し、*Dubliners* から *Finnegans Wake* に至るジョイスの女性像とイェイツの女性像の連動を考察した。ラディカルな文学という相貌においても、イェイツはジョイスに最も近いことを論じた。

(2)2019年度においては、J. M. シングとジェームズ・ジョイスの女性像という観点から、両者の連動を考察した。ジョイスは1903年にパリでシングと交流しただけであるが、その文学には深い関心を示した。シングは *In the Shadow of the Glen* (1903) をめぐり、ダブリンの観客の反感を受けていたが、その最大の理由は女性に声を与え、そのセクシュアリティを描いたことであった。シングの文学は、国家をめぐる女性表象の脱神話化において、アイルランドの父権性を問題視することであったのだ。そのため Arthur Griffith のような民族主義者だけでなく、Maud Gonne のようなフェミニストたちからも異議を唱えられた。それに加え、シングの作品にはカトリックに対する蔑視もあった。

このようなシングの作風はジョイスのものでもあった。*A Portrait of the Artist as a Young Man* における男を蠢惑する女性、あるいは海岸で水と戯れる少女のセクシュアリティなど、シングの *In the Shadow of the Glen* や *Aran Islands* (1907) の影響が色濃い。さらに *Ulysses* では、冒頭の挿話からシングを示唆する描写を含み、セクシュアリティを肯定する Molly Bloom の独白で終わっている。David Lloyd が *Anomalous States* (1993) で指摘するように、姦通のテーマは国家への侵入にも等しいが、シングはイェイツと比べ、アイルランド人女性の実情を念頭に創作した。田舎を舞台としつつも人間の深層心理への眼ざしにおいては、都会を舞台とするジョイスの創作と類似している。Robert Hogan の5巻本の観劇録 *Modern Irish Drama: A Documentary History* (1975-84) や、Arthur Griffith の新聞 *The United Irishman* での非難も精査し、前年度のイェイツとの比較を交え、ジョイスの女性像へのシングの影響を検証した。

(3)2020年度においては、レイディ・グレゴリーとジェームズ・ジョイスの女性像という観点から、両者の連動を考察した。*Ulysses* の第二挿話では、ダーヴォギラへの言及があり、イギリスによるアイルランドの植民地化のテーマと不義密通との関りが論じられている。家庭への侵入というテーマは、イェイツとグレゴリーの *Cathleen ni Houlihan* からシングの *In the Shadow of the Glen* へと連結するが、グレゴリーは劇 *Dervogilla* (1907) や *Grania* (1912) において、

さらに一歩進めて、ジョイスと連動する自意識的なモダンな女性を描いた。

ギリシア神話に傾倒したジョイスと対照的に、グレゴリーはアイルランド神話に惹かれた。両者の相違はアイルランドの東と西という対照的な拠点にも認められるが、グレゴリーに先立って、Douglas Hyde の *Love Songs of Connacht* (1893) といった神話の翻訳も流通し、当時の文学者を刺激していた。ジョイスも新聞や雑誌を通して、グレゴリーの影響を受けていた。それに加え、グレゴリーは Constance Markiewicz や Hanna Sheehy-Skeffington といったフェミニストとも関わりがあり、国家をめぐる女性表象の脱神話化においては、イエイツやシングよりも苛烈であった。アビー劇場という制度を取り巻く当時の社会事情も念頭に、イエイツやシングとの比較を交え、グレゴリーとジョイスの連動を検証した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 結城史郎	4. 巻 74
2. 論文標題 『ユリシーズ』に伏在する亡命アイルランド人作家とジェイムズ・ジョイスの国家観	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 富山大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 113-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 結城史郎	4. 巻 73
2. 論文標題 アイルランドの女性表象とレイディ・グレゴリーの脱神話化 『グラニア』を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 富山大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 183-194
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 結城史郎	4. 巻 71
2. 論文標題 アイルランドの女性表象とJ. M. シングの脱神話化 『哀しみのディアドラ』を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 富山大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 105-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 結城史郎	4. 巻 70
2. 論文標題 アイルランドのフランケンシュタインとしてのW. B. イェイツ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 富山大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 197-208
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 結城史郎	4. 巻 69
2. 論文標題 ジェイムズ・ジョイスの作品の背景としてのダブリン	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 富山大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 147-160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 結城史郎	4. 巻 4
2. 論文標題 『ユーマ』における主人公のアイデンティティ形成をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ヘルン研究	6. 最初と最後の頁 41-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 結城史郎
2. 発表標題 コルム・トビーン『ブルックリン』における郷里と流浪 アイルランド人のアイデンティティの再構想
3. 学会等名 20世紀英文学研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 結城史郎
2. 発表標題 ウィリアム・シェイクスピアへのジェイムズ・ジョイスの敵対 『ハムレット』の改作を中心に
3. 学会等名 富山大学人文知コレgium
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 結城史郎
2. 発表標題 『ユーマ』における精神風土 アイデンティティ形成の礎
3. 学会等名 富山大学ラフカディオ・ハーン研究国際シンポジウム
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 結城史郎、大島由紀夫、倉持三郎、薄井良治、大熊昭信、奥山礼子、外山健二、小林英里	4. 発行年 2020年
2. 出版社 金星堂	5. 総ページ数 193
3. 書名 『現代イギリス文学と他国』	

1. 著者名 結城史郎、樋野幸男、藤川勝也、呉人恵、永井龍男、澤田稔、入江幸二、佐藤裕、野澤豊一、喜田裕子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 桂書房	5. 総ページ数 120
3. 書名 『富山大学人文学部叢書 人文知のカレイドスコープ』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------